

平成 23 年度
地域研究を通じての
国際経済分析者養成プログラム
(JICA 連携プロジェクト)



一橋大学 中国短期海外調査 報告書



「地域研究を通じての国際経済分析者養成プログラム」

一橋大学経済学研究科では、平成 21 年度より文部科学省の支援のもと、「地域研究を通じての国際経済分析者養成プログラム」を実施しています。海外に関する「現場感覚」を備えた学部学生を育てることを目的として、経済学を中心とする社会科学の体系的なカリキュラムに加えて、JICA との連携により、学部学生を対象とした途上国経済の実態や開発援助・国際協力の実情に関する授業などの拡充を図っています。

本プログラムでは、平成 22 年度より短期海外調査を実施し、日系企業・現地機関の訪問、現地の学生との討論会を行うことで、将来国際的な分野において研究者や専門職業人を志す意欲的な人材を育成することを目指しています。今回の中国短期海外調査はその二回目の調査にあたり、調査の費用の一部は、日本学術振興会「平成 23 年度組織的な若手研究者など海外派遣プログラム」から補助を受け、実施されました。

Acknowledgments

We would like to extend our sincere appreciation and infinite gratitude towards all who have made this overseas research such a rewarding experience for the ten of us. We would like to thank the International Monetary Fund, the People's Bank of China, the Chinese Ministry of Finance, Japan International Cooperation Agency and all the staff at respective organizations for kindness and invaluable wisdom. We also greatly appreciate such courtesy from Panasonic, Sumitomo-Mitsui Banking Corporation, and Hitachi.

We are truly grateful to Fudan University, its faculty members and all the students who have participated in such productive discussion and the most hospitable treatment a guest could ever ask for.

We feel indebted to the Hitotsubashi University alumni association Josuikai, both the Shanghai and Beijing Branch, for a wonderful dinner and insightful conversations.

This program could have never been so successful without the support of so many people, namely Professor Yumi Saga for her useful advice and meticulous work in correcting presentation, Ms. Yuko M Inukai for her organizing the trip, Mr. Mikio Shiwa for his splendid presentation about China, Mr. Akira Saito, Mr. Wen Wang, Mr. Ichiro Otani, and last but not least our Professor Ryu Gun, who has been the planner of this splendid program and a great support for us from the beginning throughout the project.

Thank you all again. Your helps take us to a whole new world.

本調査プログラムは、本当にたくさんの方のご支援とご協力に支えられ、我々10人にとってかけがえない貴重な経験となりました。出発前の準備段階から英語チェックやプレゼンテーション準備に手伝ってくださった佐賀先生、旅行の準備を管理してくださった犬飼さん、特別講義でいらしてくださった中国交流センター代表の志波幹雄さん、復旦大学の先生方や学生、訪問先として受け入れてくださったパナソニック、SMBC、日立、IMF、JICA、中国人民銀行、中国財政部、案内してくださった斎藤彰さん、開澤法律事務所の王穂さん、元IMF中国代表事務所所長の太谷一朗さん、如水会上海支部および北京支部の先輩方、そして、一から今回の調査プログラムを立ち上げ、大変貴重な機会をくださった担当教員の劉群先生に、この場を借りて心からの感謝を申し上げます。

～CONTENTS～

Acknowledgments

中国短期海外調査によせて

一橋大学経済学研究科長・経済学部長	蓼沼宏一	……p.5
一橋大学経済学研究科特任講師（担当教員）	劉群	……p.7

第Ⅰ部 はじめに

Foreword/はじめに	……p.10
プログラム内容紹介	……p.12
メンバー自己紹介	……p.14
—Column 「 BUBBLY! 」	……p.19

第Ⅱ部 準備日程を振り返って

準備日程を振り返って	……p.24
中国予備知識（特別講義記録「中国はどこへ行くのか？」）	……p.26
復旦大学での発表資料(PPT)	
経済班	……p.28
開発援助班	……p.38
教育班	……p.44
—Column 「 *FOOD* 」	……p.49

第Ⅲ部 現地調査記録

現地調査日程/記録

日記

DAY1～8 (9/11～9/18)	
—如水会支部との食事会	
@上海	……p.65
@北京	……p.66

復旦大学学生交流レポート	……p.67
経済班	……p.68
開発援助班	……p.71
教育班	……p.75
交流感言（復旦大学学生より）	……p.78
Photos at Fudan University	……p.81
企業・機関訪問レポート(訪問先企業名敬称略)	……p.83
[日系企業]	
松下能源有限公司（Panasonic）	……p.84
三井住友銀行有限公司	……p.87
日立電線有限公司（HITACHI）	……p.91
[蘇州工業地区]	……p.94
[政府系機関]	
国際通貨基金（IMF）中国代表事務所	……p.96
国際協力機構中国国際センター（JICA 中国）	……p.100
中国人民銀行	……p.104
中国財政部	……p.108
—Column「 JAPANESE ⇔ CHINESE 」	……p.112
第Ⅳ部 調査プログラムを終えて	……p.115
個人レポート	……p.116
メンバー他己紹介	……p.135
写真（Pics in China）	……p.140
—Column「 SHOPPING* 」	……p.146
—Column「 SANITARY* 」	……p.147
第Ⅴ部 おわりに	……p.149
おわりに	……p.150
編集後記	……p.151

中国短期海外調査に寄せて

一橋大学経済学研究科長・経済学部長

蓼沼宏一

一橋大学経済学研究科・経済学部は、文部科学省の支援のもとに、国際協力機構（JICA）と連携し、2009 年度から 4 年計画で「地域研究を通じての国際経済分析者養成プログラム」を実施している。この報告書は、その一環として行われた学部学生による中国短期海外調査の成果報告である。

本プログラムは、諸外国・地域の経済実態や国際協力の実情に関する授業、海外調査事前自主ゼミ、現地の大学の学生との共同ゼミや開発援助プロジェクトの調査等を内容とする海外調査を組み合わせた参加型の教育プログラムである。さらに、2004 年度に開始された経済学部・大学院経済学研究科 5 年一貫教育システム（学部入学から 5 年間で修士学位の取得を可能にする教育システム）を構成する 3 つのプログラムの 1 つである「地域研究プログラム」にも接続している。

近年のリーマン・ショックやヨーロッパ各国の財政危機の波及効果に象徴されるように、現代の世界は、ヒト、モノ、カネ、情報の複雑なネットワークで結ばれており、ある場所で起こった経済現象は、世界の他の場所に多大な影響を及ぼす。一方で、世界の各地域は極めて多様であり、経済の実態をつかむためには、経済学の理論・分析手法を習得するだけでなく、実地調査を行うことが不可欠である。

「商法講習所」という名称で明治維新直後に誕生した本学の創設期の学生達は、ヨーロッパからの輸入学問としての社会科学だけではなく、「実学」をキーワードに、アジア諸地域の言語を含む外国語や海外経済の実態を学んだ上で、いち早く世界経済の荒波に乗り出していった人々である。本プログラムは、いわば、この「商法講習所」の原点に立ち返って、経済学の基礎を学んだ学生達に、世界経済の現場を知る機会を提供することにより、現場感覚を持つエコノミストを育てることを目指している。

2011 年 9 月に実施した中国短期海外調査は、本プログラムが実施する 2 回目の海外調査であったが、多くの方々の暖かい協力に支えられて、成功裏に終了することができた。大学間交流の機会を与えていただいた復旦大学の方々、多忙の折に貴重な時間を割いてくださった国際機関、中国政府機関、在外日系企業の方々、調査実施前から様々な形でお世話いただいた JICA 関係者の方々、後輩を激励してくださった如水会北京支部・上海支部の方々、そのほか本プログラムにご助力を賜った多くの方々に、経済学研究科・経済学部を代表して心より感謝申し上げる次第である。

今回の調査に参加した学生の中から、次代を担う若手研究者や国際協力に貢献する人材が 1 人でも多く育つことを期待している。

中国短期海外調査に寄せて

一橋大学 経済学研究科特任講師

劉群

昨年度におけるインドネシア短期海外調査の前例があるとは言え、中国の事情はインドネシアと大きく異なり、何を中心に視察すべきか改めて問い直す必要があった。中国は多様性に富んだ世界最大の発展途上国であり、最も豊かな上海と最も貧しい貴州省の 1 人当たりの GDP を比較すると 10 倍ほどの格差が存在する。一週間という短い滞在でこの国の核心に触れる—これは容易ならぬ課題であった。中国は 30 年前に社会主義経済体制から市場経済体制に転換を始めて以来、現在もなお移行経済の只中にある。未だ市場経済体制が完全には整わず、政府の干渉が大きいため、通常の経済理論で説明できない部分も多い。さらに、56 の民族・人種が混在し、文化、言葉も多様であるために一言で中国を総括するのは極めて難しい。「群盲象を評す」と言うが、まさに現在の中国はどこに触れるかによって受けるイメージが全く異なる。このように中国固有の様々な懸念事項はあったものの、何よりも参加した学生ひとりひとりが中国について何らかの新たな視点を得られるようなプログラムを組むべきだとの思いに至った。そのためには中国経済に関わる様々な方面の人々と直に交流することが最善であると考え、中国の多様性の縮図とも言える北京と上海を見学地を選んだ。まず、政治と文化の中心である北京では、国際機関の事務所や政府機関を訪問し、マクロ経済政策を中心に調査することにした。一方、経済の中心地の上海には多国籍企業の本社が多く設置されているので、日系企業や日系銀行を中心に訪問することにした。

こうして 5 月 27 日に第 1 回自主ゼミが始まった。最初のゼミでまず伝えたのは、「教員はあくまでも補佐役であり、学生各自が自主性を発揮することを期待する。」という私の方針であった。幹事長や学生連絡係などの役割分担を明確にし、学生たち自らを進行役とする自主ゼミが徐々に軌道に乗って行った。無論、その過程は平坦ではなく、9 月 11 日からの現地調査までにクリアすべき課題は山ほどあった。中国の名門大学のひとつに数えられる復旦大学の学生との討論会で行うプレゼンテーションの準備もあれば、訪問先の企業や国際機関の事務所や政府機関でのヒアリング事項もまとめなければならない。参加者の所属する学部と学年は様々で、それぞれに関心が異なるため、彼らひとりひとりの関心を集約・反映しうるプレゼンテーショントピックを設定することは容易ではなかった。そこで、まず中国に関する基本的な共通の文献を全員が読んだ上で、中国について各々が最も知りたい事や中国に関する自分なりの意見を抽出し、復旦大学の学生側の意見も参考にしながら最終的に 3 つのテーマに絞り込み、グループごとに異なる観点から日中両国の比較論を述べることになった。学生たちが選んだテーマは、高度経済成長、教育制度、政府開発援助の 3 つで、いずれも非常に興味深い問題であった。次に、国際機関である IMF および JICA、政府機関の財政部および人民銀行がどのような仕事をし、経済体制のなかでどのような位置づけにあるのかを調べる必要があった。更に、現地機関でのヒアリングや復旦大学の学生との交流はすべて英語で行われるため、短期間での英語の上達も求められた。

ゼミは7月末までは毎週金曜日の週1回を基本としたが、8月の1週目と9月の2週目にはより集中的なスケジュールを組んで最終の仕上げを行った。特に苦労したのは討論会で発表するプレゼンテーションの準備である。各グループは日々準備に追われた。

出発直前まで様々な不安は拭えなかった。しかし、各グループが準備段階で十分にディスカッションを重ねた甲斐あって、最も心配していた復旦大学との交流会でもすべてのグループが素晴らしい発表を見せてくれた。発表後のディスカッションも時間が足りないほどの盛り上がりようであった。その後の企業訪問や政府機関訪問などでも予定時間を大幅に超過するほど議論が白熱した。こうした学生達の積極的な姿勢は訪問先にも高く評価して頂いた。第Ⅲ部には研修中の成果を現地調査記録（日記、復旦大学学生交流、企業・機関訪問報告）としてまとめたものを掲載した。いずれも具体的なメッセージを伝えるまでには至っていないが、中国というひとつの発展途上国のありようを実際に目で見て確かめて来た学生たちの経験と感動を読者に少しでも感じて頂ければと願っている。

私は2009年4月に「地域研究を通じての国際経済分析者養成プログラム」の特任講師として着任し、今回の調査プログラムを担当することとなった。どうすれば学生達に中国の経済事情を正しく伝えられるのか、という問いを常に心に抱えながら過ごしているが、この研修のための自主ゼミでは私も学ぶところが多かった。貴重な時間を共に過ごした学生達に感謝したい。また、今回の調査の機会を与えてくださった蓼沼宏一先生、佐藤宏先生、大月康弘先生、奥田英信先生、小田島健先生、佐賀裕実先生、調査出発前に危機管理オリエンテーションをしてくださった服部誠先生、中国の実情を紹介してくださった志波幹雄さん、素晴らしい事務サポートをくださった犬飼裕子さんにお礼を申し上げたい。また、現地日系企業、中国政府、復旦大学、JICA、IMF、並びに本学のOB・OGなど多くの方々のご協力なしには今回の現地調査の実施は元より実現しようもなかった。調査費用の一部は日本学術振興会「平成23年度組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」よりご支援を頂いた。このように各方面の方々から頂いた温かいご支援に深く感謝申し上げます。また、こうしたご支援に十分にお応えしうだけの結果を私どもが出し得たのかどうか、皆さまの率直なご意見を伺うことができれば誠に幸いである。

最後に、研修に参加した学生達に一言伝えたいと思う。グローバル化が進む今日、常に外の世界に目を向ける必要があるのは言うまでもない。ただしその際に重要なのは、どのような視点から外界を見つめるかという点であろう。今回の調査から得た経験を糧にして、常に自分なりの視点を持ちながら自信と勇気を持って未知の世界に分け入ってほしい。あなたの方がその長所を更に伸ばし、日本と諸外国とのwin-winの関係の構築のために世界のどこかで活躍する人材に成長することを願ってやまない。